

ASD 傾向, HSP 傾向, 抑うつ傾向と感覚特異性の関連について

227B002 尾崎 那美

問題

Aron (2010) は、感覚情報を強く深く処理する生得的な個人特性（感覚処理感受性, SPS）の高い人を Highly Sensitive Person（以下 HSP）と呼んだ。HSP は自閉スペクトラム症（以下 ASD）と感覚の敏感さを共有し、両者の併存や判別が議論されている。また、ASD は抑うつとの併存が指摘されてきたが、HSP 傾向も抑うつと関連があるとされている（塚田, 2021）。

ASD は男性が多いのに対し、HSP は女性が多いことから、両者の関係性にはまだ不明な点が多い。また、HSP においては、感覚の敏感さに焦点が当てられてきたが、近年、ASD の感覚特性において、感覚過敏と感覚鈍麻、感覚回避と感覚探求が共存しうることがわかってきた。そこで、本研究は性差も考慮しながら、ASD 傾向と、HSP 傾向、抑うつ傾向を取り上げ、それらと感覚感受性との関連を検討した。

方法

参加者 大学生 112 名が参加し、有効回答数は 93 名（男性 37 名、女性 56 名）であった。

課題と手続き 質問紙による調査を行った。HSP 傾向の測定は高橋（2016）の Highly Sensitive Person Scale 日本版（HSPS-J19）を用いた。ASD 傾向の測定は、若林・東條（2004）の AQ 指数を用いた。抑うつ傾向の測定については、日本語版 CES-D（島他, 1985）を用いた。感覚特性の評価については、日本版青年・成人感覚プロフィール（以下 SP）を用いた。

結果

HSP 傾向と ASD 傾向の相関関係

HSP 傾向と ASD 傾向の間には $r = .389$ の比較的弱い相関がみられた。

SP 間の相関関係

感覚過敏と低登録 ($r = .658$)、感覚過敏と感覚回避 ($r = .633$)、感覚回避と低登録 ($r = .566$) の間に有意な相関がみられた。

HSP, AQ, SP 下位尺度と CES-D スコアの関連

AQ の細部への注意、想像力と SP の感覚探求を除く、すべての HSP, AQ, SP 下位尺度が CES-D スコアと有意な相関を示し、感覚感受性や ASD 傾向は抑うつ性と関連することが示された（HSP の美的感受性のみ負の相関値であり、それ以外は正の相関値であった）。

クラスター分析による参加者の分類

HSP, AQ, SP, CES-D の全ての下位尺度を用いてクラスター分析（Ward 法）を行った。その結果、参加者は 4 つの群（I群:28 名、II群:12 名、III群:29 名、IV群:24 名）に分かれた。また、 χ^2 検定の結果有意差はなかったが残差分析の結果 II 群のみ有意に男性が多く、女性が少なかった（Table 1）。

Table 1 男女に関する χ^2 分析結果

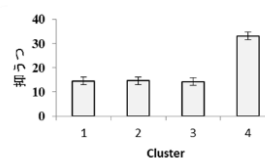
変数	性別		合計	
	出現値	男性		女性
Cluster	1	12	16	28
	2	8	4	12
	3	9	20	29
	4	8	16	24
	合計	37	56	93

4 群の分散分析

抑うつ傾向、HSP 傾向、ASD 傾向、感覚特性の各指標について、クラスター分析によって分類された 4 つの群を独立変数とした 1 要因分散分析を行い、下位検定として Holm 法による多重比較検定を行った。

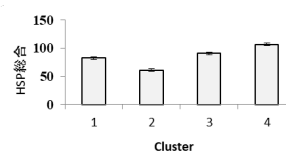
抑うつ傾向 群の主効果が有意であり第 IV 群のみ、他群よりも突出して抑うつ性が高いことがわかった ($F(3, 89) = 31.744, p = .000, \eta^2 = .517$; III 群 < I 群 < II 群 < IV 群; Figure 1)。

Figure 1 各群の抑うつ得点



HSP 傾向 HSP 総合得点については、群の主効果が有意であり ($F(3, 89) = 46.405, p = .000, \eta^2 = .610$)、II 群 < I 群 < III 群 < IV 群の順であった (Figure 2)。

Figure 2 各群の HSP 総合得点

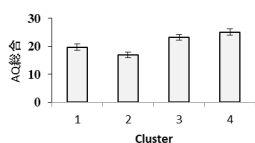


なお、HSP の下位尺度について統計的に有意な主効果が得られたものは、低感覚閾（II 群 < I 群 < III 群 < IV 群）、易興奮性（II 群 < I 群 < III 群 < IV 群）であった。

ASD 傾向 AQ 総合得点については、群の主効果が有意であり ($F(3, 89) = 8.102, p = .000, \eta^2 = .215$)、II 群 < III 群 < IV 群、I 群 < IV 群の間に有意差が認められた。

(Figure 3)。

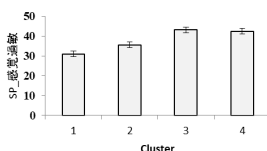
Figure 3 各群のAQ総合得点



なお、AQの下位尺度で統計的に有意な主効果が得られたものは、社会的スキル(II群<I群 III群 IV群)、注意の切り替え(II群<I群<III群 IV群)、コミュニケーション(II群 I群<IV群)であった。

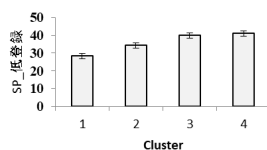
感覚特性(SP) 感覚過敏は群の主効果が有意で($F(3, 89)=16.439$, $p=.000$, $\eta^2=.357$), I群 II群<III群 IV群の順であった(Figure 4)。

Figure 4 各群の感覚過敏



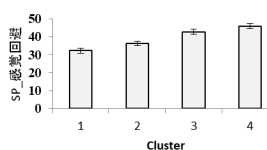
低登録も群の主効果が有意で($F(3, 89)=15.790$, $p=.000$, $\eta^2=.347$), I群<III群 IV群の順(II群は各群と有意差なし)であった(Figure 5)。

Figure 5 各群の低登録



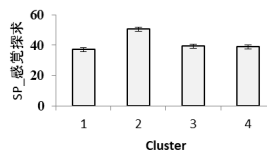
感覚回避も群の主効果が有意で($F(3, 89)=18.811$, $p=.000$, $\eta^2=.388$), I群 II群<III群 IV群の順であった(Figure 6)。

Figure 6 各群の感覚回避



感覚探求も群の主効果が有意で($F(3, 89)=9.186$, $p=.000$, $\eta^2=.236$), I群 IV群 III群<II群の順であった(Figure 7)。

Figure 7 各群の感覚探求



考察

本研究の結果、相関分析では、HSPとASD間に正

の相関($r=.389$)が見られた。また、感覚過敏と低登録($r=.658$), 感覚過敏と感覚回避($r=.633$), 感覚回避と低登録($r=.566$)の間にも有意な相関が示され、敏感さと鈍感が共存することが認められた。さらに、AQの細部への注意、想像力とSPの感覚探求を除く、すべてのHSP, AQ, SP下位尺度がCES-Dスコアと有意な相関を示し(HSPの美的感受性以外は、すべて正の相関値を示した)これらの傾向が抑うつ性と関連することが示唆された。クラスター分析では、I群はHSP傾向が中程度で、ASD傾向と抑うつ傾向が低く、感覚特性の特徴も示さなかった。II群はHSP傾向が低く、コミュニケーション能力と感覚探求が高い特徴があった。III群はI群と似たHSP傾向を示しASD傾向も注意の切り替え以外は差がなかったが、感覚過敏と低登録を示し、感覚回避の傾向も強い特徴を示している点がI群とは異なっていた。IV群はASD傾向や感覚特性はIII群と同様であったが、HSP傾向がより強く、抑うつ傾向が他の群と比べて突出して高かった。これらのことから、ASDとHSPの併存が抑うつに關係する可能性が示された。

性差については、 χ^2 検定では有意差はなかったが残差分析の結果、II群のみ男性が有意に多い結果となった。本研究では女性参加者が多かったため今後は、より多くの参加者を対象とした研究で吟味していく必要がある。また、抑うつ傾向が顕著に高かったIV群については、その背景に不安傾向など他の抑うつ関連要因が隠れている可能性があるため、群の詳細な特徴や分類についても明らかにしていく必要があると考える。

引用文献

- Aron, E. N. (2010). *Psychotherapy and highly sensitive person: Improving outcomes for that minority of people who are the majority of clients*. New York: Routledge.
- 島 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 昌弘 1985. 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723.
- 高橋 亜希 (2016). Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19)の作成 感情心理学研究, 23, 68-77.
- 塚田 花音 (2021). 感覚処理感受性と非定型うつとの関連について 日本健康心理学会大会発表論文集, 87-91.
- 若林 明雄・東條 吉邦・Baron-Cohen, S., Wheelwright, S. (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討一. 心理学研究, 75(1), 78-84.